

い お う じ 医王寺の仏像 や く し に よ ら い しょう かん の ん ぼ さ つ 薬師如来と聖観音菩薩

【医王寺の歴史と仏像】

八代市袋町にある真言宗寺院・医王寺は、国指定重要文化財の薬師如来と熊本県指定重要文化財の観音菩薩がまつられていることで知られています。

寺院の創建については不明ですが、『^{ひこくし}肥後国誌』という江戸時代の地誌によると、医王寺は、まだ松江城(八代城)がなかった頃の松江村、今の市役所のあたりにありました。しかし小西行長の支配した時代(1588～1600)には荒廃してしまい、その跡地は「薬

師森」と呼ばれていたそうです。江戸時代、松井家が八代城に入ってしばらく後の寛文2年(1662)、石原町(宮地町の一部)に移転、さらに3年後の寛文5年(1665)、松井^{よりゆき}寄之の妻・^{すほういんに}崇芳院尼の願いによって、松井家の^{きとう}祈祷所として現在の袋町に再移転しました。医王寺には、寛文5年の再建の由緒を記した^{むなふだ}棟札が伝えられ、松井家との関わりを示す貴重な資料となっています(4頁に解説)。

明治の神仏分離の後、妙見宮(今の八代神社)の神宮寺のひとつであった^{ふもんいん}普門院の住職が医王寺に迎えられ、この時、^{みょうけんぼさつ}妙見菩薩像や^{におう}仁王像など妙見宮の仏像が医王寺に持ち込まれました。その後、再び無住の時期がありましたが、現住職の先代・有田家が再興して現在に至っています。

真言宗・医王寺本堂全景



医王寺には本尊の薬師如来の他にも観音菩薩、大日如来、不動明王など多くの仏がまつられて



← 医王寺本堂内部

います。これは、真言宗寺院の特徴でもあります。密教を説く真言宗では、^{こんごうかいまんだら}金剛界曼荼羅・^{たいざうかいまんだら}胎蔵界曼荼羅に表現された無数の仏の中から、それぞれの寺院と縁のあったどんな仏でも信仰することができるからです。

【薬師如来とは？】

仏教では、我々凡人は貪瞋癡(とんじんち)(むさぼり、怒り、無知)の三毒に犯された重病人とされ、仏は我々の病を治してくれる医者だといわれます。なかでも薬師如来は、我々が生きている間にご利益を授かることができる「現世利益」の仏として厚い信仰を集めています。

『薬師本願経』によると、薬師如来は、仏になる前に現世利益を中心とする「除病安楽」など十二の大願をたてたといえます。そして、悟りをひらいて仏になった後は、東方の薬師瑠璃光浄土という仏国土に住み、約束どおり大願を实践して人々を救っているのです。

【薬師如来のすがた - 威厳のある姿でご利益も増大? -】

如来とは、さとりを開いた仏のことで、釈迦如来、阿弥陀如来、そして薬師如来などがよく知られています。頭頂に「肉髻」という智慧のこぶを持ち、煩惱を意味する装飾品を一切つけないのが如来の特徴ですが、如来の名前を知るには、手の形(印相)で区別します。薬師如来は、右手を上げ、左手に薬壺をもっています。しかし、飛鳥や奈良時代の薬師如来には薬壺を持たない像が多く、見ただけでは区別出来ない場合もあります。

薬師如来のような現世利益の仏には、病気を追い払う力強さ、やさしさよりは威厳のある姿のほうが、より効力があると思われたのでしょう。薬師信仰が流行する奈良から平安時代前期にかけて、男性的な肉感と威厳ある表情を強調した仏像が多数作られました。京都・神護寺の木造薬師如来立像(国宝)はその代表例です。



木造薬師如来立像 室町時代 医王寺所蔵

参考

木造薬師如来立像
平安時代前期 京都・神護寺所蔵

【平安前期のスタイルを復活した医王寺の薬師如来】

医王寺の木造薬師如来立像は、衣のしわが腰から内股に集まり太腿を強調する、まさに神護寺の薬師如来のスタイルを再現したものといえます。しかし、平安前期の重量感のある仏像に比べ、体はスリムになり、顔の表情はいくぶん穏やか、衣のしわも素朴な表現になっています。また頭部の肉髻が低く、螺髻(髪のか)が太いこと、髪の生え際が額の中央で下がっていることなどから、室町時代の作と考えられます。室町時代に、あえて平安前期のスタイルを再現したことは、薬師如来としての特別な意味があるのかもしれませんが。

【慈悲の心で人々を救う観音菩薩】

さとりを開いた「如来」に対して、^{にょらい}観音菩薩や^{かんのんぼさつ もんじゅ}文殊菩薩、^{じぞう}地蔵菩薩などの「菩薩」は、如来になるための修業の最終段階にいて、修行を続けながらも悩み苦しむ我々に救いの手を差し伸べてくださいます。なかでも慈悲の心で我々の悩みを解消してくれる観音菩薩は、最も親しみやすく人気の高い菩薩です。

『観音経』には、^{しゅじょう}衆生(人や動物などすべての生きもの)が諸々の苦しみを受けたときに、観世音菩薩の名を聞き、一心にその名を唱えるならば、観音菩薩は直ちにその音声を観じて、ことごとくその苦しみを取り除いてくれるといい、観音菩薩の奇跡が語られています。

【聖観音菩薩は女性のほとけ？】

観音菩薩は、衆生の立場に応じた姿に変化して衆生を救います。十一の顔で周囲を見渡しもれなく衆生を救う十一面観音、千本の手であらゆる悩みを持つものを救い取る千手観音をはじめ、その種類は六観音、三十三観音といわれるほど多様です。その変化する前のオリジナルの姿が「聖観音菩薩」なのです。一般に左手に蓮の茎を持つのが聖観音のシンボルですが、古い観音は^{すいびょう}水瓶を持つ場合もあります。

観音菩薩も薬師如来と同じく、現世利益の仏なのですが、薬師如来が威厳のある男性的な表現が多いのに対し、観音菩薩の慈愛に満ちた表情は、むしろ女性的な表現です。悩み苦しむ人にとっては、すべてを包んでくれるやさしさが必要なのでしょうか。

仏には本来性差はないのですが、仏像は、そのはたらき、そして各時代の人々の願いを反映して、かたや薬師如来のような男性的、かたや観音菩薩のように女性的な仏像が生みだされました。

【医王寺の聖観音菩薩立像】

医王寺の観音菩薩像は、端正な顔立ち、衣の皺のリアルな表現と彫りの深さなどから、鎌倉時代の作と考えられます。鎌倉時代の仏像は、一般的に武士好みの美意識を反映し、写実的な表現を特徴とします。この仏像も、緊張感のある鎌倉時代のすぐれた写実表現で仕上げられています。ほんの少し腰をひねった体の曲線美が、女性的なイメージを生み出しています。そして、この仏像は、県内数ある観音菩薩像の中でも屈指の美しさを誇ります。

変化観音の代表例

木造十一面観音立像
平安時代前期
滋賀・向源寺

木造千手観音坐像
平安時代前期
大阪・葛井寺



木造聖観音菩薩立像 鎌倉時代 医王寺所蔵

(解説 石原)